



実りの「くい掛け」大蕨の棚田（山形県山辺町）

あぐる

山形県山辺町の山間部にある
「大蕨（おおわらび）」の棚田
に、この秋も稻を干す「くい掛け」
がすらりと並んだ。その数
は約1000本。1本のくいを
軸に稻束を積み上げる地域伝統
の干し方と棚田の独特な景観を
地元農家らが守っている。

棚田ができた時期は不明だ
が、江戸時代初期に当たる寛永
13（1636）年の領地目録な
どに記録が残る。高低差60㍍の
斜面に26枚の水田が広がる。総
面積3・4㌶のうち、現在2・

横樋を結び付けて軸にする。稻
束を12戸の農家が耕作し、県
が育成した品種「里のゆき」を
作っている。

くい掛けに使う樋は杉の木
で、長さは約2㍍。これを、あ
ぜに穴を掘って約2㍍間隔で立
て、大人の膝と腰の高さに短い
横樋を結び付けて軸にする。稻
束ほどを積み上げる。

農家らが協力し、10日間かけ
て大量のくい掛けを作り、10日
置きに掛け替えるながら約1カ月
干す。稻作農家の武田一男さん（71）
は「稻穂のまま乾かすの

は両手でつかめるくらいの束に
して、初めて横樋に掛け、続
けて方向を変えながら、最終的に
60束ほどを積み上げる。

大蕨の棚田は、県内に三つある
日本の棚田百選認定地区の
一つ。1999年の認定時には
全体が使われていたが、2011
年「中地区有志の会」を結成。
くい掛け体験や、サッカーJリ
ーグ・モンテディオ山形の選手
と農作業をするイベントを催
し、ボランティアとも協力して
棚田の再生を進めている。



棚田産米のパッケージを紹介する稲村
さん。JAやまがたが扱っている



だんだん…秋衣装

棚田に西日が当たる夕方、
くい掛けの影が長く伸びた



くいに稻を干す農家。稻束を次々に掛ける



1年には高齢化や担い手不足が
響き、全体の3割に相当する1
社ほどしか使われなくなった。
この状況に対し、「景観を守
り、くい掛けを次世代に継承し、
同会とボランティア組織「グ
ループ農夫の会」の発起人で、
元JA全農山形職員の稲村和
さん（66）は「多くの人たちの
力でここまできた。くい掛けが
棚田の頂上まで並ぶ景色を取り
戻したい」と話す。（富永健太郎）

で、おいしくなる。今年は天氣
に恵まれ、米の出来も良い」と
作業に励んでいた。

1年には高齢化や担い手不足が
響き、全体の3割に相当する1
社ほどしか使われなくなった。
この状況に対し、「景観を守
り、くい掛けを次世代に継承し、
同会とボランティア組織「グ
ループ農夫の会」の発起人で、
元JA全農山形職員の稲村和
さん（66）は「多くの人たちの
力でここまできた。くい掛けが
棚田の頂上まで並ぶ景色を取り
戻したい」と話す。（富永健太郎）